增補華布便覽　完

CHINTZ DESIGNS

皇朝靖獻遺言巻之三

播磨山崎　横屋

謫所上書

贈正二位和氣清磨呂

和氣清磨呂備前藤野郡人鐸石別命鐸石別命曽孫弟時以軍功賜吉備盤梨縣因舊姓盤梨別公後改野別真上為右兵衞少尉神護中授

姓吉備藤野和氣真人進叙近衞將監賜封五十戸景雲姓輔治能真人為因幡員外以抗直而其所持大義至忠威武不能屈也帝素敬宇佐所憑語無事不從及寵僧道宰主神中臣習宜阿曽麻呂幡神教言令道鏡即皇位則

道鏡少為僧以禪行聞道鏡淵修如意輪法宿曜法有驗

東都久須美孫右衛門編輯

浪華學本文昌堂藏版

先年蓬莱散人佐羅紗便覧といへる書を著す其意詳なりといへども数品少し因て書肆松柏堂是を増補せん事をこふ今年未た部類を分ち前編に洩しゝ類を盡さゞるに増補羅紗布便覧と題し愈世に流行して写者の便となしぬ

東都金吹町住家名白子屋　久須美孫左エ門

鳥ノ尾紫頭ハラ生エンジ
地アイ
花生エンジ
ツル紫

生エンジ
葉ツル紫
一タイ平金オリヘシ
生エンジ

カバ
抜ムラサキ
生エンジ
アイー
エンジ
紫
生エンジ中ハ白リ染入リ
生エンジ
黄ハ
生エンジ
アイニ白リ染入リ

生エンジ
ムラサキ
茶
生エンジ
生エンジ中染又キ
葉ウルノルイモアヰ
黄
生エンジ中染又キ

生エンジ

黄

生エンジ

アイ

タイノ細書紫

ラヤノ有墨
ラヤノ有墨
アイ

汁中生エンジ
汁中不残ツクイ
黒キ上ヨリ生エンジ
一所墨

小鳥出トモ虫手トモスミカキギリアイ葉アイニキザミ花ハ赤ニテリハリヨトリモヽイロミベーンチミ鳥アイ

唐

リウキウ　テウセン

金サラサモアリ

コンロンサラサ　クロホウトモ云　南京ト云ハアヤマリカ

惣アイ也イーシノナンニテ此通ナカキアイニテソメル洗ナトミニテハナ茶ナカケル

地紫
生エンジ中ウスク同
葉ノルイアイ
黄
地生エンジ
墨
生エンジ

黄

アイ

紫

生エンジ

モエギ

ムラウチカバ

カラクサハ生エンジニ白ク臙ヌリ

ツ葉モエギ

イア

生エンジ

生エンジ
ムラウチアイ

紫ウスク同

生エンジウスク同

一縞遠不残アイ

地生エンジ

山フチエンジ

不残亀甲ノ中ヨリモ多ニテ薦ク出

墨三字
ありし点
ヱ不残
金ヲ画
ヘシ

一ダイノ縹絣

地ナヤ

生エレジ

地アイ

生エルジ

墨

アイ

生ヱンジ
ツルハモヱギ
チヤ
アイ
モヱギ

いれ墨
墨
墨
月

黄ハ
アイ
黄
黄ハ

タイコキアイ

生エンジ

白ク染ヌク

一觧之地生エンジ
花ノルイウスキ生
エンジ
ジリ白
ミくアイ大青ナカノ
丸キモノノ白ク淵又ク
細出ハ墨

一タイノ地コビチヤ

ヒワ染ヌク

生エンジ

生エンジ

ウスキ生エンジ

白ク染ヌク

一タイノ細ニ緋地チヤ

生エンジ

生エンジ
ユリ
生エンジ
葉ツルモエギ
生エンジ
アイ
一タイノ地生エンジニテ吹絵
白
墨

アイ
アイ
エンジ
ムラサキ
生エンジ
キヤ
生エンジ
中カバ
葉ノルイ
白地ニ不地アイ

アイ
モエギ
生エンジ
内白

銀花布　唐也

スミカキ
イロナシ
茶地也
又イロ有
トキハ
ムラサキ
セイイロ
赤
ウスムラサキ
アイ
「草イロ
見ハツ…
セイテ…
銀フチ

クヽリヲカクリシベハカヽズ

アラレデ バンコク多シ

スミカキ

葉ホトジク

ミナアイ

アラレ赤

ノ星赤リ

赤

便覧
生エンジ
アイ
生エンジ
黄
紫
一タイ細ク出ハ墨
アイ
生

モエギ
白
紫
白
紫
モエギ
白
白
生エンジ
白
アイ
生エンジ
白
白
白
白
ヒ肉アイ

捻ノ古瘦

一タイノ細キ紫

生エムジ

アイ

生エムジ

ウスキ紫

葉ノルイモヱギ

一タイノ細六八鉢
一タイノ地アイ
ウスキ生エンジ
紫
ツルのルイハ白
コキ生ンジ

書更紗下地仕拵之事

更紗をしたて切れへ書んと思ハゞ先極上の延の生渋を
蘭鑵にかけてとるへし其取よふにて蘭鑵の
中へ入れ其の蠟へ生渋を入て蒸ば誠ハ清水の如くなれ
〻を其縁へ流れてたれる之又蘭鑵のゆき口ハ同じ
大きさの茶碗を二ツ、これより一ツの茶碗へ生渋を入
次へうけて其蓋ハ右の茶碗を渡すにハ上の茶碗ハ、
〻濁気のうつるなりそれを渡しく脈の蠟へ移せバ

酢壱合ばかりいれてなりと百遍もまぜ合ふ時に天
気のよきころ鉛小粒ほどの金布を塗し板の上に並置の
生渋を刷毛もつて二三度もひくへし夫より二度と乾かし
干とてのりかける

生臙脂せき拵の方

極上の生臙脂をこまかにしてさかづき把へ入水をつぎ
ふんとうし志ぐほど漬置て能あらためて売など蓋
其上をよくのひがらしの人と揃へたり用ゆ生臙脂を使

いはらげぞろくと纏とろし臓へとりいおげをあてざきよし蓋
上皮をそろつとこそげば膜を残し候流し入置候ゟ其節
刺に残し生膽脂とうすき皿へぬりつけ天日にほして
干付る事ありしごくの入物へ少し錦紙を三二へ
うけて乾し候べし天気よき時入申候へば湯氣
にて乾し候べし

藍蠟とさるゝ事

皿へ水とかし入りか藍蠟を鄙にとき又寿をさし

はくと。とるべし煉んと云時ハ氷膠を少し入
て煉よろしき藍の色ハ煎じて出し物へ胡粉
加へ賀茂川の水を取寄せ煉へ何れの絵の具も光彩
とするあり図取又文章新渡の更紗小空青の如き藍
なり是ハ和蘭ヘルレイニスブラウアリと云物にて
画家が同じく弘めり是を珍重する者ハ神田小紀文
平賀ハ何かしらず一向世上の絵の具屋なぞ小さく
あしし此絵の具の煉ひよふハ一杯紺青なさいまつ

とゑへて水色の色に緑青を少し入れて濃くとき
氷膠を入て又絵具とき天日にて干付べし入用の時
ハ水をかして入墨を摺まぜて用べし

雌黄とき様の事

雌黄の色ひよふハ爪の如し是も上品なる
るハ八丈島より出る黄を入れて用ゆ時ハ少し
藍を入て黄の色のきさもつよさも其人の加減
なるべし

黒地の事

古法に黒き地合の文様ありこれにも二色ある事
光彩のなきとなきつやのあるとを書時は薄墨にて地
をよく染其上を墨にて好るつやのなきを
書時は墨を先にし薄墨を後にするなり黒書は
前の如し

白く染ぬる心得

何色にても模様を白く染ぬくはとばの飛粉

も嚼べし又こまかく嚼時ハ糠を去小米を
分けて嚼るもよし

金更紗の事

金更紗銀さらさの類ハ何にても模様を書仕舞
浮ひし浮ふて葛の根をとうすきこしらへ出来し
更紗を嚼墨へ漬とやにして次糞より葛のり
ごしに浮べ浸して能干上りしる時角にて能
摺金と金んとを焼わり水膠にてときし故粉

かて一通り書乾しハ水膠をさいびにときその上を
と又一遍書乾かぬうちに金をまきおくべし左ば
らくして金をちらしなバ模様のみ浮残るなり新渡
に殊外光彩のまさるも白ハ古のごとし

更紗書模様之事

書ざらいの地合ハ極上の金巾にてかくべし又絹に
も書するなれど一躰絵の具の光彩をおさゆれハ薬種
大坂にて書更紗地のまゝとさし細唯今書んと

写生絵のまゝを多くあるは拙き事にて悪しくこそあるなれ
絵合にしらしるゝ絵のまゝ一向色の取合物なり
せん書んを写ふ又細よようて模様なぞしとぞして書にて
細く出て工様の色相定ししるへてさせ着色して
同色にても何しなにて模様など濃く書時はうすく
にうすく淡色よく乾きし時上を濃く書べし
人形など画くにも竹木草花鳥獣など南京更紗今更紗
蒔絵なども多けれど書法は同じ事なり中ります

生臙脂も少し黒くてうすくなる角を見れハ紫極少し
藍を交て用ふるなり紫の色ハ藍に生臙脂を交
か臙にて用ふる事黄に少し、ひのゝみのうて用ゆる
ハす臙脂を少しく交之一躰書画ともに筆意の
大きに違ある物にて筆も心のまゝ不器用にて書
といふことなきハ不器用なれバ秘伝有べし紋柄とも細く
深切にして思ふ所ハ皆書法なれバ飛輪を細くとも
太くしとも書絵かきし時一面に絵の具を塗

従ふて筆ひ発せバ自ら揮指の音おのづから調ふ開発
よ手法しる法ハ無尽蔵にて取し其溢ふて
道せしりも勿論いかの絵の具とも手ふも筆法
筆分のも右の生涯をもつといへども皆筆ふハ
及ぶ法ハ道を継ぎしりハ西りして後藤之

法と筆ひよふぬ事

右残る墨を引く書法篇一句るも側にふ其書蔵し
も筆のしかと継く見べし筆ひし従ふて、絵の具

と請度、其目出来とりくる更紗とすべし一枚の
上にのせ生漉をよらして二三度も筆にて揉へ
引一面に切れの裏へ通るを十分に天日にて干
べし揩して明礬水を入洗へば光彩と成し生漉
も落しと思ふ時はふてさりと絞り重塗し板へ
表の方を下に張付置て張付干べし此末鐵焼洗ふとも
落る事毛頭なかるべし

古裂紙ようの事

古渡の更紗を書時ハ色しく古更紗の付よふハ裏書
紙につゝみ焼火のうへにて蝋置ば自然とくすぶる
事又急に古びを付るには松薪を焼所の
煤を取切れに包入よろしく絞ても少し古水
にて更紗を二三度も染干よろしき時ハ古渡の
ごとし。古色ある事なれば其上古びを付んと思ハゞ
板の上へのせ小刀にて裏よりそろ／＼とこそげ自
緯を切ぬるが如くに破れたるやうなり其所へ裏よりつぎをあて

切れと雖丁寧につけバ古代の実形と見ゆる也

急書極のこと

前書のとをり急にして略して書バ幾年求に慣て
筆ふとも翁なるべし又蘆蕭鑵の其時家
焼にて真面側なる時に和の油蕭白蕨に
かやうし墨小を少し入て能摺つぶし切れ分包
て練まし合羽筵極の上より漉て汁右の汁
とりよく干書よりも写文の如し出来よりしる

明礬をとかし火にかけ置て模様の上を筆に
て書生臙脂をちらさゞる物也心得べし
其上を又明礬にて引べし数度も引ば厚なる気
すこしあれど大方薄紙に書て善悪ひとわり通事を
色目ハいろいろわかれども口伝ハ筆紙に述がたく
画人の工風有べし

蓬莱山人帰橋撰

安永十年二月發行　定價金參拾錢

明治十六年四月求版

大阪北久宝寺町三丁目

製本所　文昌堂　華井安次郎

發賣　文榮堂　前川善兵衛

書肆　積玉圃　柳原喜兵衛

增補華布便覽 完

CHINTZ DESIGNS - ZŌHO KANUNO BENRAN